

毛夷東環記（一）

浪川健治

一八世紀後半、ロシアの南下に端を発した蝦夷地をめぐる状況の悪化によって寛政一年（一七九九）には東蝦夷地、箱館およびその近在が幕領化された。それに伴い享和二年（一八〇二）、蝦夷奉行（のち箱館奉行・松前奉行）が異民族支配と対外防備を掌管する遠国奉行として置かれた。このことによって、津軽藩は南部藩とともに永統勤番が命ぜられた。幕府による蝦夷地支配の体制を支える直接の軍事力として位置付けられるにいたった。津軽藩は寛政九年（一七九七）から一一年までの箱館勤番に加え、寛政一二年と享和元年（一八〇一）には箱館、サワラ、懸り沼、ヲシラナイ、モリ、ワシノキ、ヲトシベ、ヤマコシナエ、ヲシヤマ、レブンゲ、アブタ、ウス、モロラン、ベナレフダ、ホロベツ、シラライに計三二八人、翌二年には箱館、サワラ、アブタ、モロラン、シラライに計二三〇人、享和三年から文化三年まではエトロフ、箱館、サワラに享和三年計二一五人、文化元年計二五〇人、二年計二六一人、三年計二五八人の藩士を勤番させた。また文化元年から三年にはこれに加えシツカリからレブンゲにいたる新道開削のため人数を（元年）一〇三人、

二年六五人、三年六七人）派遣している。『毛夷東環記』を構成する「東蝦夷地紀行」と「衛刀魯府志」はいずれも文化元年から三・四年にかけて東蝦夷地・エトロフに派遣された津軽藩士による記録である。

当該期、とくに文化五年から八年にかけての東蝦夷地の地理や状況についての精密な史料として第一にあげられるのは、箱館奉行所の命によって各場所の詰合から報告されたものと推測されている「東蝦夷地各場所様子大概書」（『新北海道史』第七巻史料一、北海道、一九六九）であろう。『毛夷東環記』に比べ、地理や産物、沿革といった各場所ごとの規模や経営についての正確さについては、当然ながら同史料が勝さっている。しかし、『毛夷東環記』の史料的な価値は、「大概書」に先行して東蝦夷地全体の状況を包括的に知るものというだけではなく、まさに序の部分で「蝦夷は 吾藩接界の地」と述べられるように日常的に異域に接した地から見た蝦夷地、アイヌ民族観が示されることにある。例えば、各地の居住戸数が「夷家」「華家」「人家」という区別をもって記載されるのはじまり、アイヌ語地名の漢字表記に対する疑問の呈示、アツケシのイコトイによる改俗拒否のありさま、「夷」「禽獸」観の否定など

多岐にわたる。しかも、それらは津軽アイヌの由来や津軽とエトロフ・アイヌとの間の食生活の類似などとともに記される。まさに「接界の地」としての津軽に生活するものの目を通して語られていることにこの史料の最大の特徴、史料としての価値がある。

『毛夷東環記』には、ここで底本とした南津軽郡浪岡町の長利暢雄氏の所蔵となる長利家本のほか、現在、写本として存在が確認されるものに①北海道大学北方資料室（旧記 659）、②市立函館図書館（00230-762-6003）、③市立弘前図書館（岩見文庫、Gk299-6）に所蔵される各本がある。このうち①北海道大学北方資料室本（以下、北大本）には「山形蔵書」の印が押される。③市立弘前図書館本（以下、弘前本）には「于時安政六巳未年十月廿一日写終 源次泰」の記述があり筆写年代が確定できる。また、同様の記述が②函館市立図書館本にも見られる。このことから函館図書館の用箋に筆写される同本は、明治以降に③の弘前本を写したものであることがわかる。長利家本『毛夷東環記』は表紙が失われており、24・5 cm×16 cm、六二帖である。また、本史料の序の部分と末尾には陰刻の同一の角印が押されているが、残念ながら印文は不明である。

家伝によれば、長利家は紀州熊野に住した長理仲澄が、故あつて奥州津軽軽井沢（王余魚沢、現・南津軽郡浪岡町）に移り長利太夫と称したのにはじまる。その子孫は浪岡北畠氏に仕えたが、天正四年（一五七六）の北畠氏の没落後は鞠の沢（現・五所川原市）に居住して「神官同様」に祭事を執り行い、文祿のころに松倉飛竜宮を再興したという。三代三右衛門は前田野目村（現・五所川原市）に移住し「社務職」を務め、四

代原子村九郎こと三右衛門に至り吉野田村（現・南津軽郡浪岡町）に移住して八幡宮を建立、貞享総検地によって松倉観音堂はじめ周辺一一の社寺が「抱」として書き上げられたという（長利家文書「由緒書」）。『津軽藩国日記』の宝永八年（一七一二）四月一八日条には、吉野田村宮本坊の書付が上申されている。それは大破した堂社の修繕のため吉野田村・青森・油川での松倉観音の開帳の許可を求めたものであり、それによって同観音信仰の広がりを窺い知ることができる。なお、本史料を所持したと考えられる人物は『毛夷東環記』の成立時期との関連からみて、文化一〇年（一八一三）に跡式をうけて文政三年（一八二〇）に死去した八代左膳、同年に跡式をうけて安政元年（一八五四）に死去した九代筑前、同年に跡式をうけて明治二六年に死去した一〇代佐渡こと定衛のうちのいずれかであろう（長利家文書「郷社松倉神社由緒調査書」）。

『毛夷東環記』の序にある「柿園主人」とは、嘉永六年（一八五三）に八〇余歳ないし九一歳で没した山形宇兵衛長年の号である。現在、市立弘前図書館岩見文庫には山形宇兵衛の手になるものとして天明と天保飢饉に関する「ためし草」（Gk611.39-3）、「天保巳午留記」（Gk612.10）がある。後者は当時郡奉行の職にあった宇兵衛の留書である。このほか、「孔雀楼筆記」や「成形図説」など実に雑多な諸書からの抜書である「柿園雜記」（Gk049-4）の存在によって宇兵衛の収書家ぶりが推し量られる。

山形宇兵衛によって序のなかで紹介される「東蝦夷地紀行」の作者「山崎某」は、田舎庄館野越村（現・北津軽郡板柳町）に居住した浪岡北畠氏の末裔と伝えられる山崎立朴の第二子である山崎半蔵と考えられる。

半蔵は実名久頭、本立また万里堂と号した。寛政年間に算術指南として召し抱えられ、勘定人加勢として文化元年にはモロラン、翌二年にエトロフで越年した。文化四年ふたび蝦夷地勤番が命ぜられ勘定小頭としてソウヤ詰合下役を務めたことが斉藤勝利（文吉）「松前詰合日記」（北大北方資料室、旧記²³）に見られる。市立函館図書館には、半蔵の著作としてほかに「万里堂蝦夷日記抜書」天・地（00230-762-5001、同5002）、「蝦夷日記抜書」（00230-760-6002）、「松前下蝦夷地紀行」（00230-762-6004）、「宗谷詰合山崎半蔵日記」3至5巻、6至8巻（00230-762-5004、同5005）がある。このうち、「松前下蝦夷地紀行」は『毛夷東環記』におさめられた「東蝦夷地紀行」と同内容である。「宗谷詰合山崎半蔵日記」は残念ながら1至3巻を欠くものの文化三・四年のエトロフ警衛に関する記述や東蝦夷地道中記を含み関係史料として注目される。一方、「斉藤某」に比定されるのは文化三年四月一日に幕府からのエトロフ詰合増員の命令を受け取った津軽藩が派遣した勘定小頭斉藤蔵太である（みちのく双書八『津軽歴代記類』、青森県文化財保護協会、一九五九）。エトロフ詰であった斉藤蔵太はほかに文化四年四月の「エトロフ嶋夷人改俗之儀ニ付御祝儀次第書」と題される史料を残している（国立史料館蔵津軽家文書1336）。ただし、同時期には前述の斉藤勝利（文吉）もありその可能性も無しとはいえないが、斉藤勝利は「松前詰合日記」によって文化四年にはシャリ詰であったことが確認される。したがってここでは、序にあるように文化三・四年に確実にエトロフ詰であった斉藤蔵太に比定しておく。本書の成立と流布の時期とありようを知る重要な手掛かりである末尾の「東奥合浦隠士 樺斎山人」は、①「衛刀魯府志」

の著者斉藤蔵太の号、②合本し『毛夷東環記』にまとめた柿園山形宇兵衛の別号、③『毛夷東環記』を直接に写し各本共通の被写本を作った第三者の号が考えられるがいずれも決定的な根拠を欠く。常識的には①と思われるが、確実には成立が文化六年前後、弘前本に見られるように幕末にかけ流布したことを知るにとどまる。

さて、山崎の手になる記録と『毛夷東環記』を比較検討すると、けして序にあるようにたんに山形が合冊したものではないことに気付く。例えば、「山越内」の項を市立函館図書館蔵の「松前下蝦夷地紀行」でみると、「詰合同心」から「オホツ内」までの記述の後はずぐ「夷家六・七、夫よりユフラツフ」に続き、一段下がって記述される「山越内の事」の項を欠く。以下の各地の記述によっても、『毛夷東環記』のなかで一段下がって記述された部分は「松前下蝦夷地紀行」では見ることができない（ただし、この「山越内」の項、長利家本では「オホツ内」から一段下がりがりとなっているが、弘前本や北大本では「山越内の事」から下がりおり長利家本の誤写として本紹介では扱っている）。したがって、この一段下りの部分はこれを合冊した際に「柿園主人」、すなわち山形宇兵衛の手によって書き加えられたものと考えられる。ただし、斉藤の「衛刀魯府志」はほかに原本・写本ともなく比較できないが、『東蝦夷地紀行』からみて山形宇兵衛によって何らかの手が加えられているものと思われる。

なお、山崎半蔵によって記された市立函館図書館の「万里堂蝦夷日記抜書」地（00230-762-5002）には、「山形蔵書」と「丸善」の屋号が入った「弘前新町岩見文庫」の二つの印が押されている。この「山形蔵書」

の印は北大本『毛夷東環記』にも同じく見られる。したがって、なお十分な検討が必要ではあるが「山形」なる人物が山形宇兵衛その人であって、これらの史料、とくに山崎半蔵にかかわる一群の史料はあるいは「柿園雜記」によって知られるような収書家でもあった山形宇兵衛の所蔵であつた可能性が考えられる。そうした場合、その山形の収書群が、やがて明治から昭和にかけて弘前新町で丸善の屋号で質屋業を営んだ岩見常三郎の所有へと移り、この過程やその後の岩見文庫の一部散逸によって各機関の所蔵となつたことが推測される。

このことの可否も含めていずれも詳しくは別稿に譲ることとするが、そう仮定した場合、もつとも原史料に近いテキストとしては「山形蔵書」の印がある北大本が考えられるが、次の点から本紹介ではとくに長利本を底本として用いた。それは、同テキストが津軽地方の旧家から見いだされたことによつて少なくとも津軽の民衆のなかに流布し受け入れられていたことは明らかであり、北奥の人々がどのような蝦夷地やアイヌ民族に関する知識を得ていたのかを知る手だてとすることができるからである。事実、この長利家本『毛夷東環記』には随所に墨引きがなされており、所有者が関心を持つてこの書を読んだであろうことは確実である。本史料の紹介の目的はあくまでも、異域に接した人間の眼によつて編まれた『毛夷東環記』の内容の解明だけでなく、その流布を確認してそれによりなかに津軽の人々に共有されていったのかを知ることにある、底本として長利家本『毛夷東環記』を選んだ理由もそこにある。

本史料の紹介にあたっては、次のような編集方針をとつた。

一、本紹介では長利家本『毛夷東環記』を底本に、弘前本と北大本によ

つて校訂を加えた。各テキスト間に異同がある場合、その箇所の右傍らに（弘「一」）（北「一」）としてそれを記した。

一、漢字は原則として常用漢字を用い、常用漢字表にないものは原文のままとし、当て字は原史料のままとした。合わせ字はもとの仮名に改めた。また変体仮名は平仮名に改めた。ただし、助詞のうち者・盤などは「は」または「ハ」に、茂は「も」または「モ」に改めた。

一、明らかな誤字は右傍らに（ ）で正字を示し、意味不明の場合は（マ）を記した。脱字は右傍らに（―脱）（―脱力）で示した。汚損などで判読できない文字は字数の分かるものは□、不明のものは「」で示した。

一、欠字は一字あけとした。

一、本史料には読者によつて傍線が引かれている箇所がある。それについてどのような関心を持つて本史料が読まれたのかを知るために同様に表示した。ただし、傍線が続いて付されているはずにもかかわらず、墨がかすれたり切れたりしている部分は…で補足した。

一、本史料を理解するに必要な年号などを右傍らに（ ）で補足した。

本史料の掲載を許可された長利暢雄氏、また便宜を図っていただいた五所川原市史編纂室には厚く感謝申し上げます。加えて、瀧本壽史・麗慎一・辻喜久子の各氏にはひとかたならぬご協力を賜った。末尾ながらお礼申し上げます。

毛夷東環記 □^(印)

此書は文化の初め頃、^(半蔵・本立)山崎何某、主命によりエトロフ警衛に宛られ彼地に詰合、猶そのかみアツケシ辺までしば／＼往反して基土地・山川・嶮岨・難易・戸数・産物まで悉くに書記しぬ、末の巻は文化三・四の頃、君命により、^(蔵本)齊藤何某、二タ年あまりエトロフにとまり、其風土・人物・鳥獸・魚鱉に至るまでつふさに書載せぬ、蝦夷は吾藩接界の地、その地理・人情、つまひらかに知すんは有へからず、今此二書をあ^(弘・北・わせ見)「」る時は東蝦夷地の地理・人情、粲然としてたなこゝろを指か如なれハ、はた二子の功大ならずや、予、竊に合本して仮に毛夷東環記と題しぬ、

^(山形字兵衛)柿園主人 識之

東蝦夷地紀行

箱館より二里ニて亀田村、家数十一・二、八幡宮の社あり、銅葺にて立派也、亀田川の川尻に子ノ年始て橋を懸る、亀田より一里余ニて松前城下江通るの五里、追分塚あり、是より一里程ニて一本木に至る、大木荅本あり、地名とす、大野村の八・九町手前に鍛冶在所と申処あり、家四・五軒あり、大野村、泊、家数四十計、皮足袋と云物あり、浜松の麦飯の類也と云、^(弘・北・作)畑□多し、梨子・李の類能熟す、大野より十二・三町行、一渡村、家数三十計、八幡宮の社あり、社内とも格別よし、当所と大野の間、新田開発専ら也、越後辺の百姓五百人余御雇越のよし、四月六日、此村

を通りしに、今嶽初と見へて二町歩余計開けたり、用水堰等^(弘・北・格別の)「」

御手入なり、一渡より三十町計ニて新山村、家二・三、夫より峠下村、是まで大野より弐里、是より直に峠へ登る、弐十町計ニて下りて大沼の岸也、向は内浦嶽、此廻り五里余といふ、沼に添一里計行、小沼峠に至る、下りて沼あり、小沼と云、廻り一里半計、夫より

八里半、スクノツへと云所に至る、昼所なり、是まで大野より四里半、

是より二里半行、砂原辺への通り、追分あり、鷺木へハ川を越て行、

此川より森と云所あり、^(弘・北・迄)一里計、同所には人家十五・六、夷家七・八軒、峠下村より是までの間、悉く雑木茂り如暗、秋は紅葉雲を染め近

山に映す、大沼・小沼の気色尤奇観なり、森村より石川原まで半里計、

石川原ト鷺木ハ一村も同様、橋一ツを隔とす、両所にて家数四十余、

鷺木村の下に崎あり、湯の崎と云、此磯岩浜なるに遠浅まで所々水沸^(マ)

湧、其色如油流れ、且鉄醬の如く嗅気あり、是へ遊び入小魚悉く死す、

土人はを湧湯と唱れとも、湯にはあらず水なり、

鷺木よりボウビ、家数五・六、^(弘・北・小川二)小川の隔て、エヒヤコタン、家六・七、

夫より本茅部、家八・九、鷺木よりはまで一里、濁川・石倉、家三・

四、ホン内もならへ家数、^(屋カ)華・夷共にて七・八、本茅部よりはまで一

里、是より中浜、夷家二・三軒、夫より落部、家十七・八、夷家六・

七、昼所也、鷺木よりはまで三里、村下に川あり、七・八十石までの

舟入る、落部より野田追まで二里、家数六・七、此村より砂原辺を都

て茅部と云、野田追の村端に川あり、落部川位也、夫より沼尻、家数

華・夷共に入、四・五、夫より湯生、同四・五軒、右二村、山越内統

も同様なり、

山越内、此節、詰合御同心近藤斧八、華夷家四、夷家六・七、(弘北道)半□計ニ
てオホツ内、

山越内の事、以前の夷地名を尋しに、ヤムクシユ内と云、ヤムハ栗
の夷言なり、クシユハ助辞也、カと齧積す、ナイハ沢也、然ハ栗カ
沢と釈すへし、此辺山中栗多くあれハなり、山越内と齧積して夷言
の本意を失ふ、可笑、此地名に限らず惣て如斯ハまゝあり、

夷家六・七、夫よりユフラツフ、夷家十一・二、大川あり、魚多く出
るなり、此川より出る魚、鼻先反たる故、鼻曲り魚と唱ふ、夫よりブ
イタウシナへ、夷家二・三、夫よりフレムカラ、同四軒、人々此名を
山崎と云、山の出崎ある故也、夫よりシラリカ、同六・七軒、昼所也
此処を黒石と云、磯辺に黒き大岩ある故也、夫よりホロナへ、夷家五・
六、シラリカより一里半程にてムクンヌイ、夷家四・五、大川あり、
是よりクンヌイの砂金川なり、シラリカよりはまで一里半程、夫より
一里計にてワルイ、夷家七・八、又一里計にて紋別、同八・九軒、そ
れより一里程行、小砂万部、同八・九軒、大川あり、魚多く出るなり、
此川添、西へ細道

山越内・於舎万部、此両所より臘臍臍出る、東海に当所計也、ヲツ
トセイ年々出方の多寡尋しに、松前侯御領の時は年に五・六より七・
八まで得たりしか、御料に成て後、得る事稀也、(文化五年)去辰の年、漸二ツ
を狩得たり、皆献上となる故、下に商売なしと也、

小砂万部、夷言ヲシヤマベ也、(弘前本、この部分を欠く)シヤマベハ平目の夷言也、此地、遠
くより望めハ山中カレイの形したる元有し故、シヤマへと号せしよ
し、ヲハ助語也といふ、如斯類にて名付しまゝ有之なり、

有、西蝦夷地のシツ、越る道なり、十五里程ト云、日永の折□(弘北)通し
行、短日の節ハ山中に黒松内ト申処あり、是にて泊るとなり、小砂万
部よりシツカリ峠下まで三里、同所よりライハまで二里程、重モ立之
御役人等通行の節、爰へ小屋懸して昼所とするなり、是より一里半計
にて礼文家、今朝強霜なりし、辛夷満開也、四月九日也、

シツカリより礼文家まで四里余、松前侯領地たりし時、道なくして
チツプ(夷舟の事なり)にて往来せしよし、御料となりし後、僅に道を付て歩行
の者ハ往来せしとなり、文化元子ノ春より吾 君此所に御人数を遣
され、同三寅の年まで三ヶ年、吾国人数手を以て此道路を開き、漸
して事成就しぬ、誠に聖徳万世を浴すへし、シツカリの上り口、山
急にして道すへき様なし、石を砕き山を穿りて九折に道をなす、尤
棧道なり、嶮岨、筆し難し、

礼文家、家七・八軒、会所後、山上に観音堂あり、則同所近辺に岩屋の
観音迎海岸の岩窟にありしを、昨年爰へ移し安置せり、当所より山に
登り下てウエンチャシと云所あり、チャシとハ夷語に陣屋と云(るカ)か
城なり、ウエンハ悪き也、其山嶮岨にして道路悪きを云、チャシハ如し、夫より又山に登り下
りてウツフケシ、夷家八・九、此村入口に松平信濃侯の近信のよし嶋
隼之助カ木牌あり、是は申の年、戸川藤十郎(寛政二年)後筑前守
両所へ附添来りしに、奥地にて御両所へ別れ独登り、アフタより舟に
て礼文家へ参るの途中、爰に舟を付、浜へ上り、夷人共に三徳又は羽
織(弘北等を)等を呉て申けるハ、予、独上るハ子細あり、一念の至る毎に胸裂、
骨砕るか如し、生て無益故に今自殺すへし、狂には非ず、汝等驚く事
なかれ、今日、予、賃人夫たるの好ミを以て死骸を爰に埋ミ隠し給れ

と乍言、切腹せしと夷人共語りしなり、我も其折居合せしに死骸を見て、榮名の人も浮世そと思ひし也、夫よりヘンへ、夷家十軒計、大川あり、昼休小屋あり、是までレフンケより二里半余、是より一里半計にてフレナイレフンケよりフレナイまで吾国御人数を以て伐開たる道なり、嶺なり、フレナイの下り口九折坂なり、二十四曲ありと言、夷家十二・三、夫よりアフタへ三十町、

阿武多、詰合調役下役福井政之助、夷家四十余、人家四軒、夫よりウスへ十二町、ウス、夷家三十四・五、華家二・三軒、当所、水不自由なり、能泉あり、恵廻水と書たる建札あり、澗由、但澗口狭く、其上澗中所々岩あり、夜分ハ勿論、昼にても不案内の舟方は六敷し、善光寺の古寺あり、これ今別の貞伝僧開基となり、去ル戌年焼失せり、当年建立の由にて、宮本源次郎・福井政之助兩人、今日地所見分の体に見えたり、白ヶ嶽白ハ夷言ウシヨロ也、船人の能淵を云也、山をウシヨロノボリと云、ノボリハ嶽なり、尔今硫黄焼にて煙り多し、昔焼発たる跡穴、径り二十丈余、深サ数十丈、穴の中に発残たる真有、甚危聳、誠に日辺に迫れり、其上に堂あり、此絶頂へ登り道尤危し、殊に煙吹出る所至て多く、手足の指を焼る有、(事カ)蔭に湖水あり、廻り三里半程と言、中に浮嶋三ツあり、程能所に並峻く、峯外の奇景也、此湖水の落水口、二十五・六丈の大滝也、此滝の近辺十丈余計の山振動し、水煙遠降る、本邦所々の大滝名所も比類なし、殊更天河の落所、千雷の屯する所かと思ハれ夥敷事也、ケ様の大滝も見入る人のなけれハ、有無誰力論たる事も不聞、華地にあらハとそ、連の者とももの申せしも理りなりと見物せし也、滝尻、大川となつて流る、(北其川の名)其名をシヤウヘツと云、シヤウとハ夷語滝也、ヘツとハ川の事なり、ヲサラヘツといふ小川と合して海に入、ヲサラヘツは地名なり、アフタより同

所まで三里、昼休所の小屋あり、夫より二里計にてイマリ、夷家一・二軒、夫より一里半にてチマイヘツ(弘チマイヘツ文化三年)、是より十町計にてモロラン、当寅ノ年、登之節見しに、善光寺再建立、寺建坪七・八十坪、和尚・雑僧共十二人、其外家来旁大勢也、寺御普請美麗也、寺料百俵十五人扶持被下置、芙蓉の間にて独礼也といふ、右の寺は白の里にあり、

宗旨浄土 大白山 導場院善光寺

当寺開基津輕今別町本覚寺貞伝和尚、本尊同作也、寺領本書の通り、外に一年五十金ツ、給り、関東十八檀林の次座也、予、享和三亥年、此辺を通りし節、僅九尺四面位の草庵の中に本尊を安置す、住僧共に同居せし仏也しか、今は堂々たる大伽藍となつて、本尊光もさして見ゆ、木にて作れる仏たも盛衰浮沈あり、況や人おや、

白嶽の麓、牧場三ヶ所、平野豊沢、滝股なり、大塚に戸川築前守・原新助・江間彦八郎・福井政之助、(北面)片西に年号、此牧場、昨年下りの節、右体の塚も無りけるか、去年中斯大荘に成たり、築前守様、昨・今年も為見分御下なり、右牧場は亥年より政之助懸りたり、此所は私領の節も牧馬取建、(北始)年初の折、種馬式十六・七疋有と云、父馬は去年改て御召之内御下之よし、右牧境、大門を立、海際、又ハ所々ハ大矢来

ニて境を立、所々ハ牧馬守之家、立派の御普請也、左之助・又助・宇五郎等と申者、元南部より雇越ニて会所ノニて旅人通行の馬追なり、予、元より覚あり、然処七両ニ四人扶持被下置候よし、政之助咄合也、右体之者七人之よし、何れも帯刀ニて公儀御役人構敷形作なり、モロラン、夷家三、会所今年取建の体なり、詰合御同心六笠仁兵衛、白老迄の扱なりと云、是より半道計にてヘケレヲタ、夷家三・四、モロ

ランよりエトモへの渡、舟路一里、是より澗口也、此間、白鳥澗と云、廻り四里程、異国人も知り居る澗にて、先年イキリス舟、又ヲロシヤ舟澗懸りせしハ爰なり、エトモ、会所よし、前に大黒嶋とゑひす嶋あり、風を除キ、浪を避く、夷家八・九、山に地竹多し、土産、帆立貝名物なり近年貝小きによつて七ヶ年之間、漁する事を禁せらるる故に絶てなし、ヘケレヲタより直ニ山ニ入、同所より式里計にてチリヘツ、休所也、是より驚別まで一里計、驚別ハ浜辺なり、モロランより同所まで山七ツ越る故、七段坂と唱、驚別、夷家四・五、海へ出る崎あり、此夷村中程にモロラン・エトモの追分塚あり、是よりホロヘツへ二里、今日の道中三里計、山二里位、平地・山道、馬屯足一里式文ツ、増駄賃を払、昨年より増賃を取と云、尤嶮岨の山路駄賃増の儀、当所ニ不限人足ハ一文、馬は式文也、

予、享和三亥年、箱館に勤番せし砌、此モロランへ造酒方を命せられしに付て、箱館の老人咄合けるハ、三十年以前ハモロラン辺一統奥エゾの如く心得、尚、春・夏は雲霧深く立覆い、舟の通も慥ならず、此辺行事ハ甚難き事に覺へ、冬分番人など住居すれハ、多分ハ寒死せしに依て甚是を怖れ、適越年する者は小屋の四壁を熊皮にて張り、夜中は蝦夷に不寝の番をさせ、終夜火を焚せて寒を防ぎしかとも寒死の者多かりしに、御料と成て後は、人、彼辺へ行事は近所のことく心易く思ひ成れり、夫に従ひ天地の氣候も開けて日月も明(リカ)かに、舟方角を失ハす、人寒死する事なく、今は高貴の武士方越年せらるに無事なる事、年数僅の内に如此氣候も違ふものにやと語りき、則年、予、此辺を通行せしに、夏は蚊・虻多く、昼といへとも蚊帳を釣らされハ臥す事ならず、造酒方働の者も虻にさゝる故、昼

も火を焚て其煙の中にて働きたりしか、今年も六月通りしに今は蚊・虻もなく、夷も人になれて、専ら和語にて応対す、教化の徳、大なる哉、

ホロヘツ、夷家八・九、会所は古来の所より三町計下へ移し、昨年取建たり、是より式里行、ランホツケの坂に登る、八・九間の坂なれとも難儀なり、夫より八・九丁行、ノホルヘツ、夷家四・五軒、中位の川あり、湯花の嗅頻り也、此川アイロ嶽温泉の湯の尻也、此川を越、間もなく硫黄山道と云塚有、是より温泉有処まで三里半計、温泉平湧坪七百坪余位之処沸立居る、其外数拾ヶ所の湧坪、沸立揚る事三・四尺、四・五尺位ツ、其内、先年山蹴発したるよし大穴あり、経(徑)り十八・九間計、其内より湯の吹沸揚る事、式・三間、又は四・五間程ツ、屋ね石位の石、又は相応之大石とも見ゆる石、湯の湧揚る勢につれて吹揚る、此湧坪の近辺六・七丁の間、山動揺す、且風の順により硫黄煙吹向ふ節、近付難成、硫黄・明盤(燈)産物也、松前侯被領節より商家より役銭を出し懸りしとなり、御領となつて弥繁昌也、朱土・白土・黒土・黄土の類、全五色の土あり、見物等ニも爰に来る者、若沸坪へ踏込事を恐れ、道先の夷人、杖を以て突探り行、湯の下に伏し有処ハ、杖にて突穿ち時、四・五尺も吹け出る也故、長杖を横様に突探る事也、不案内の人、猥りに近付へからず、流れて川となる、其川、所々に人丈ケ不及可淵間々多し、此川拾丁程隔ても急流故、音聞ゆる也、湧坪より半里余も流れ下りて、漸く浴すへき温味になる、ノホルヘツより一里に足らずして浜へ下る、此浜石大小となく黒く、嶋筋立文色あり、夫より三・四丁行、川あり、川を越、アイロ、昼所なり、右川の

水は凡双なき上水也、好事の族、器物へ貯、箱館辺へ持参せし人も有之也、是までホロヘツより三里四丁、是よりメツフ、一里半程、夫よりヒキウ川まで半道計、此川を越てヒキウ、家三十軒余、浜手を去、接居能体の夷村なり、是より白老へ弐里計、アイロより白老へ四里三丁、

白老、九里、夷家十六・七、入口大河あり、此川并ホロヘツ川とも年に鮭四・五百束、七・八百束ツ、漁すとなり、此辺の産、椎茸を第一とす、当所より少々下り、沼有、白老より一里半計にてシヤタイ、夷家八・九有、(弘北川有)是より八・九丁行、ベツヘシ、小休有、川あり、是よりタルマイ、此夷村、通りより七・八丁山手ニ入、夫よりタルマイ川、夫よりニシタツフ川、夫よりユイトイ、(ユ)昼所也、白老よりはまで四里、夫よりユウフツまで五里、此間夷家なし、

寛政十一未年、蝦夷地御用始り、公ト南部侯御用懸被為蒙仰、此白老まで御当家御持場と号し、ユウフツより下、クナシリ島迄南部侯御持場也、文化二丑年、エトロフ御持場となりて、此白老まで十五場所引払いぬ、白老よりユウフツの間、路傍クロ百合見ゆる、是までハ一切なし、(弘前本、この部分を欠く)是より奥、追々にあり、

ユウフツ、八里、詰合御同心川西祐助、夷家なし、是西夷地石カリヘ二日路、東西の境、

此ユウフツ川より逆上りて西地へ越、ソウヤへ行、其里程・昼泊聞ける俣左ニ記、ユウフツ会所下より悪津舟、或ハ丸木舟に棹さし五里、星ビリ、二里、泊千歳川、舟路六里、泊エヂヤリプト、又舟ニ

て十里程(泊是より石カリ領)トイシカリ、又舟路九里、西蝦夷地也、石狩、又舟路九里、厚田、同浜マシケ、ル、モツヘ、ヲニシカ、ト、マイ、フウレヘツ、テシヲ、ヲフイニシヤ、ノツサブ、ソウヤ、右、何れも石カリよりハ泊計也、

山中に大荘なる夷村あり、是よりシユツなり、夷家千軒と古唱しと云とも宜也、サル、ユウフツの夷人、大抵、此処へ住居す、同所の川ハ石カリ川の水上なり、鮭漁広大、人々の知る処なり、ユウフツより一里行、アツマ川、大川なり、舟渡し、夷人此川に添て住む、夫より二里半計にてム川、夷家四・五軒、川を越、大塚あり、曰、是より南、千人頭原半左衛門開発畑場、片面ニ場所懸り原新助、申五月六日、是より開発畑地あり、且此処千人同心在住、(享和元年)西年始て村形を作、御雇同心とも入加、家数十三軒、何れも玄関形を仕付たる家作也、是まで夷家も無曠野なるに、一旦夕に格別の村となりたり、田畑作物色々、

此武川在住千人同心、本書の如く也しか、何れも水土に不伏故か多分病死し、残たる者も是を怖れて、事に寄せて脇場所へ移、或ハ箱館辺へ引越、頭役原新助を初、(弘北始)各所々へ移住して、今は家一軒もなく、元の曠野・平野と荒果、狐狸の棲家となりて只築地・屋敷形のミ残れり、

一此川目の夷、粟・稗・煙草等を作り、酋長富貴にして三年の貯有とそ、

此川、此辺の川の内、大なる方也、朱龜出ると云、此川辺黒百合多し、ム川開発所より新道、山道也、三里行、サル川、大川也、舟渡し、此

処夷家四・五軒、是よりシノタイまで一里程、夷家十一・二、番屋あり、此夷村入口、(義經)九郎判官社有、四尺ニ五尺位の堂、其内に厨子に入尊像あり、堂の外廻り式間四方の茅葺、此祠、元来サル川の添三里位奥に旧跡有しに、爰に亥年移建たり、近藤十蔵専ら扱はれると也、是より三十丁程にてサル、モンヘツ川、中位の川也、夷家十一・二、此辺の宜地也、地名サルと唱ふ、今日の道中ハ勿論、昨日コイトイ辺より南さし下るなり、

(義經)源廷尉、蝦夷ヶ嶋へ渡海の事、諸書に載て詳也、今爰に不論、此サル川上に本書の通、義經の古城有由、夷人カムイと称し、是を敬信す、夷人、公を呼てヲキグルメ、又アイノラツコ、又シ、ヤムホウクワントノと云、西塔の武蔵坊をシヤマエグルと云、吾藩宇鉄の夷は此サルより来れりとなり、夷人に是を尋ぬるに、津輕の夷は元此サル川目の惣乙名エソ曾長ヲサシテヲトナと云也しか、故有て争論起り雌雄を争ひしか、終に軍に負て一門從類を引連てエソか嶋を住居叶ハす、遠く日本国津輕宇鉄と云処へ逃渡りたるよし老夷申伝へたりと也、其夷のウタレ家来をいふの子孫、今曾長となりて甚富貴に暮し居と云り、

サル、六里、詰合御同心佐藤慶蔵、会所の上に弁天堂あり、(弘・北・泉本)能泉有、男・女ともサル生ハ美也と夷人申伝る也、村形よし、粗町屋の風あり、居付之者とも三・四軒、其内鍛冶・木地挽等もあり、夫よりケヌセイ川漕渡り、夫よりカハリ川、橋有、此処医家二・三軒、夫よりフ・モム夷家ちりく七・八軒、サルよりアツヘツ川まで三里十八丁、是までサルノ持場也、是より新勝府まで二里十二丁、アツヘツ、夷家五・六軒、昼所なり、アツヘツ川、大川也、舟渡し、是サル・新勝府の持場

界なり、セツフ、夷家四・五、ヌツカ、夷家八・九軒、サル辺の海尻、(弘・鼠)がつつと云鼻先長キ鯨あり、此魚鼻先尖りて三尺余の鼻先あり、肉にあらず骨なり、性水牛の角の如し、九州辺にも有といへり、(弘・北・見へたり)鼠多し、アフタ辺より此辺までハ山々にはいぬと云、形栗鼠に似て、大サ猫位の獣、夷人とも多獵す也、また麝香猫あり、予、其物を未だ見されとも彼獣糞を夷人取得て所々にて見せし也、

(弘・北・ニイカツフ)テイカツフ、会所、山の上に弁才天堂あり、詰合御同心飯田礪右衛門、夷家五・六軒、(弘・ラコマナイク川、北・ラコマナク川)入口ヲコマナイ川、村端新勝府川、舟渡、此川添九里程奥迄夷家ありと云、十七・八丁行、ウラリ、夷家十四・五、夫より十丁程行、シンヌツ、是新勝府・シフチャリの界也、是よりシフチャリまで三十丁計、大川あり、向の山手、山桜専ら也、此山、桜最多し、四月十六日、爰を通りしに尤花の最中也、夫より一里計にて、(弘・ウセナク)ウセナイ、本当の懸り澗と申にもなけれども、澗懸りなる也、夷家八・九、馬継所也、夫より一里三十丁にてシツナイ、舟懸り澗あり、番屋有、夷家十五・六、川に添て住す、夫よりブシ川、是三石・シツナイの界なり、夫よりヲコツナイ、夫よりニノコシ、夷家二・三、番屋あり、夫より三石、サルより始終辰巳をさし下る、

三石、五里、夷家四・五、入口弁天堂有、村端大川有、夫より一里余にてケリマツフ、川あり、夷家五・六、番屋あり、夫よりヲニウシ、夷家なし、夫より浦川、番屋あり、夷家五・六、是まで三石より二里余休所有、大川舟渡、此川辺ハ近辺の大出崎なり、夫よりシリエトウ、夷家三・四、夫よりクカリタイ、(弘・イカリタイ)夷家十一・二、商売小屋あり、番屋有、夫よりムコヘツ川、小川、徒渡、夫よりムコヘツ、会所、是を浦川といふ、

三ツ石、此辺の山中にチョツチャリと云獸有、其形鼯に似て小なり、大鼠位なり、其色、夏は白く冬に至て黒灰色也、甚猛くして、夷人も容易是を取事を得ず、適、生なから是を取て飼ふに、鼠を見て声を揚れハ、其鼠忽ち氣絶して地に落ち、猫も怖れて其辺に近寄事を得ずと、其猛獸の有様を見へし、本朝、未此獸ある事を聞ず、博識の君子に尋ぬへし、

浦川、三里、夷家十六・七、居付の者四・五軒、南部の勤番所有、夫よりウルクヘツ、夷家一軒、小川有、チノミ、夷家二・三軒、(弘チキシヤフシロイシ、同三)チキシヤフシロイシツミ、出崎也、夫よりホロマンヘツの崎ミゆる也、シロイツミにハ番屋有、商売小屋あり、夫よりホロヘツ、夷家二十余、大河、舟渡有、夷人共ハ此川ニ添住む、夫よりウトマンヘツ、小川也、此処夷家四・五軒、夫よりフユニ、夫よりウンヘツ川、夫よりキリシタナイ、夷家五・六軒、夫よりシヤマニ、今日の道筋、海岸の景色奇新也、三石よりはまで卯辰をさし来る、

シヤマニ、七里八丁、詰合田中定右衛門、会所の上に弁天堂・稲荷堂有、夷家十四・五、居付の者一軒、会所の陰に大河あり、川に添、山手ニ入、造酒所有、同越年処有、当所辺の氣候、田口久次郎と相評候処、江戸ニハ別て替無之、二月末に至、畑等の手入に取懸、且冬分ハ雪も降候得とも、四ツ過ニ至り悉く消散り、乍然山には一・二尺も始終有之、江戸より少寒き方ニも候得とも、箱館にて十一月初方、硯水氷たり、夫より十一月末に此ニ参しに終硯水氷たる事覺無之、下ハホロヘンヘツ先より雪も余程降數候、上はウセナイ辺より先雪相応に降積るとの田中定右衛門咄也、ニリカツより海岸危く岩多、三石よりシヤ

マニの間、同奇景也、牛の臥たるか如く、春駒の野に遊ぶに似たり、或は龍の雲間より出る如く、又長蛇の如く蟠り、或ハ美人の笑て起居するに似たる有、又僧の鉢を携て愁立か如く、小児の多く集り戯る、如き有と、此浜の景色を土人の夷人共指差て語り舟す、(弘北土地の)実に悉其形備りける、且山の平に桜の花の色々なるに、野放馬の所々に群り、或は散々に蹴躍等仕り居り、浜辺ニ夷人とも打混し、小児の手を引て磯草・浮海苔の類を摘居る等、優微なる事共也、シヤマニの造酒所迄ハ会所より十一・二丁有、此所か寺院新建立の積、ホロマンヘツの辺江神社建立の手配の由、詰合田中の、

天台ニテ八宗兼学

帰嚮山 厚沢寺

寺領・寺格 白の善光寺と同じ、

物語也、シヤマニよりヒウラと商売小屋有、夫よりフユカシユマ、番屋有、当所に幅二十間余・高サ七・八丈の如斯石門有、夷語フユとハ穴の事、シユマとハ石の事也、フユシユマとハ、猶穴石と云か如し、地名とす、奇觀なり、是迄シヤマニより一里半計、是より新道式里四十五間にてホロマンヘツ、夷家一軒、番屋有、入口太川有、此度峰崩絶峻、諸木甚茂り、大材尤多し、公儀御手始の折、日丸の大舟、大底此処ニて作たり、且是迄参る新道の内、奇景多し、塚有、曰、此新道式里四拾五間、片面に当所地名ワヤシナイ、片面に享和三(癸亥)年八月とあり、此新道は南部家にて開たり、右塚、南部役人記置たるなり、海岸通、近藤十蔵、李白岸と記大札を建たる、壁立千仞の絶岸、(北絶岸有)且位牌坂、又は大念仏・小念仏等と云嶮岨の登多し、歩行の者も実ニ難通故に、此道を開たるとなるへし、夫よりチコフナイ、番屋有、夫より

ニカンヘツ、中位の川なり、土橋、懸方甚よし、此処塚有、是よりシヤマニまで四里十一町、ホロイツミまで二里と記し置り、然ハ今日の道法六里十一町也、然るに七里八丁の賃を請、其訳尋しに、山坂難儀故、古道の里数賃を申請ると云、夫よりチカヨツフシヤツコツ、商売小屋有、アヘヤケ、小川有、土橋なり、此川に添、夷家二十二・三あり、ヌツナイ、同三軒、エンルモ、商売小屋有、夫よりホロ泉、(文化三年)當寅の年登の節見しに、等樹院建立、寺の様子旁大荘なり、振合ウスの善光寺ニ同し、

ホロイツミ、六里三十四町五十間、夷家三・四軒、持方在住六軒、夫よりシラリヲマナイ、商売屋あり、シユンウシナイコロブル、是までホロイツミより半道計、夫よりニケフツ、夷家四・五、コロフルより新道ニ入、夫よりヲタヘツ、夫より一里半計にてアツフセ、昼休息所小屋有、夫より嶮山の内一里計にてシトマヘツ川、峠坂嶮ニて長し、辛夷満開、鶯甚多し、四月廿一日、爰を通る、夫より式里程ニてサル、川、急流也、舟渡、ヌフルサル川、橋有、夫よりホロナイ、川橋、夫よりサル、今日の道中、山坂難儀なり、山中のミ也、諸木茂し、木鼠多し、五葉松多し、諸木如麻畑、通の内左ニ沼あり、澄水碧色如神沼の名をクロンホ沼と云、水ニ毒氣有と云、飲て死せるもの誰々と夷人とも指を屈し数ふ、且水神殺之など、夷とも語合事也、途中に鹿角一円落てある処あり、今日は丑寅をさし来るなり、

ホロ泉よりサル、まての間、東エソ地第一の難所エリモ崎なり、此岬、細く長く鼠の尾のことく遠く海中へ出たるを以てエリモシレッツと号す、エリモは鼠也、シレッツとは岬也、東海の通舟、此海を走る

時、大に慎ミ帆を下ケ神酒を献し、船中一同ニ海上安全(弘北の事)の事を折り、小舟の形を造て龍神へ献し、終て帆を上ケ走る由也、此岬を通る時、若舟中に猫あれハ厄難有とて甚猫を忌といへり、エリモハ鼠の夷言なれハ嫌ふなるへし、

サル、六里、夷家四軒、内持之番人、番屋を持居る也、是より山道式里程ニて浜へ下る、尤風波宣折ハ同所より直ニ浜を行候へハ一里計近し、夫より山へ入、ヒタ、ヌンケフ川、橋、尤手堅普請也、是より東、戸勝支配と建札有、夫よりトヘシヘツへ下る坂上に建札有、曰、此浜通ハトモチリシヒンナイ等の難所有て往来のもの可為難儀により新ニ此道を切開たる間、此後往来之者、一枝の木、一本の笹たりとも切透し、永く往来の為を心懸へきもの也、寛政十年十月、近藤十蔵守照ト大板に掘付たり、夫よりヲシラルヘツ、昼所也、是迄サル、より三里半、ヲナヲヘツ、川あり、番屋有、ヒホロヘツ、大川なり、夫よりヒロウ、今日、子丑をさし来る、

ヒロウ、七里五町、詰合御同心竹井五郎兵衛、夷家十一軒計、戸勝大明神の旧祠あり、持方在住式軒、当所より下、幽にミゆる崎ハ戸勝崎なり、是より一里計にてナツコ川、大川也、夫より一里計にてヌツカ川、中川也、今日為道案内、番人三六と申者道先ず、承候処、一昨年、華俗となりたると也、通例の人と少も不替、人物、却て立派也、夫より一里計にてトヨイ川、大河なり、舟渡、夫より一里半にてアクホシマム、中川也、昼所也、ヒロウよりは是まで四里六・七町、子丑をさし来る、夫より六・七丁行、モンヘツ川、中川也、丸木橋あり、夫より三十三・四丁ニて東部井、今日、子丑をさし下る、

東部井、六里十四丁、夷家二・三軒、番屋同様、泊処不宜、詰合八王子同心吉野惣吉一人住居、番人同様客扱、薪・炊とも兼、番屋より五・六丁行、東部井川、中川也、夫よりコロカヤニラン子ナイ、是まで一里、夫よりキイカマイ沼、此沼、海岸添、時化の折ハ海に混す、廻り一里半計、夫より半道計ニてイウトウ沼、廻り式里半計、右に同じ、山に入、夷家三軒、昼所也、是まで東部井より三里程、夫よりチツラフシ沼、夷語に沼をトウと云、同所小川あり、夫よりマウトウ尻、小川、橋有、夫より二十丁計ニてチャウフシ沼、廻り一里半計、是まで東部井より五里の塚あり、夫より半道計行、チコツナイ、今日、子丑をさし下る、四月廿五日通りしに、今朝凝霜なり、此浜辺、四月初方に残雪有ハ常也と云、野菜物出来かたく、ホロイツミと当所辺とハ里数僅の違なりしに、ホロイツミハシヤママに同様(ニ脱カ)の氣候也、ヒロウより此辺はホロイツミ辺とハ雲泥の違あり、是エルモ崎を越て、向き表裏の故也、ヒロウは磯より七十間程海水たりと詰合田中久次郎話也、ヒロウは鰯魚のミの漁なり、此辺通行為泊所、会所を建置様也、蚊・蛇、甚多し、

ヲコツナイ、八里七丁、夷家百軒余、大河有、此辺の大川也、夷人、此川に添ひ奥に住と云、此川、鮭は給用位ならて取られぬと云、川渡、幅五丁程、夫より一里半計行、(戸脱カ)勝川、此川、右川に不劣大川也、川に添ひ夷家八・九十ありと云、夫より一里半計ニてシヤウケヘツ、滝あり、是より昆布かるシエトウ出崎也、夫よりヲコツヘ、小川、昼所也、(北ヲコツヘナイ)ヲコツナイより是まで四里位、夫よりアツフナイ、小川、夫よりチュクヘツ、中川也、是より山道あり、海岸廻りハ浪ある節、甚危し、ア

ツフナイ、夷家一軒、中川有、徒渡、夫よりヲトンヘ、小川、夫よりチュクヘツ、中川也、尤渡舟無之、且深川故、首乗等ニて難儀なり、是までヲコツヘより三里半、是より山、新道あれとも浪高ならぬ折、海岸近く廻り易し、戸勝川辺より寅卯の方に幽に遠山ミゆる、アツケシの山也、通例の図式なと、存外也、実に離島の様にミゆる、今日の道中、大小の川く多、難儀也、戸勝川を舟にて登り、夫より山道、二日路計ニて、西、石鷹へ越るとなり、今日、子丑をさし下る、

トカチ川、東地第一の大河也、川幅二丁位より六・七丁まで、此川上、大小の沼、数百ありとぞ、本書、二日路計の石狩へ出るとあれとも、吾、此川目のエソ弥六郎逆、新に人に成たる者に尋しに、川上は七日路程あり、昔はエソ五千人余住居せしに、一年飢饉する事有て餓死多く、夫より年を経て漸に数を増、今は三・四百人計有と云、(北三百人計)

一蝶鮫、此川より産す、夷言ユウベと号す、彼弥六郎か咄に、昔、此川上に廷尉と弁慶住給ふ古跡あり、カモイコタンといふ、仙境と釈すへし、又山中、鹿多あり、廷尉、此鹿を狩て彼のカモイコタンへ多く貯へ、エソを養ひ給ひしか、余に多く積重ね、肉、腐爛して川へ流れたりしか、其膏川へ落て蝶鮫と成し故、此川に産す蝶鮫は廷尉の賜物也といへり、此川辺、山野の叢中に鹿角多有し故、今も鹿多くありや、然らハ汝等食に乏き事あるましと云しに、飢饉前は鹿夥數あつてエソの食料とし、皮と角は酒・多葉粉なと、交易せしか、余り多ある故、エソ、是を鹿抹にし、鹿の皮を生剥にし放せし者有しかハ、神明カムイ是を忿り玉ひて鹿を絶し給ひしに依て、喰物乏しく、

餓死に及へりとそ、此一兩年前より鹿少々ミゆる也といへり、おかしき事なれとも、識物者の為に爰に記す、

(なみかわ・けんじ 鴻巣市史編さん室)